

明代の一般書目にみえる古禪籍

椎名宏雄

古版禪籍の明代における伝存と流通の状態を知ろうとする場合、資料的には各種の大藏經や仏書の目録類などのほかに、多くの一般書目があることをみのがしてはならない。宋元代の一般書目に比較して、明代のそれは数量的にすこぶる多く、したがつて、仏書の著録も大量にみられるからである。

だいたい、明代における一般の蔵書傾向は、前代にくらべて一段と増大している。その理由は、經濟機構の発達とともに

に、宋元代に盛んとなつた木版技術が助長される一方、出版活動が一段と活況を呈したことがあげられる。また、『永樂大典』の編纂に代表されるように、大部の叢書を集成する文芸活動が流行し、書物の蒐集や校勘が盛んとなり、文人や名儒たちが稀書珍本の所蔵をほこつたことも、しだいに官私の蔵書を増大させる要因となつたのである。

損失前の明代には、宋元版などの古典籍が、いかに豊富に存在していたかという一例をあげてみよう。すなわち、世宗（一五二三—一五六七在位）の時に太子太師の官位にあつて権力を擅にした嚴嵩は、鈴山堂という蔵書室の中に、實に宋版六八五三部、手鈔の宋元書二六一三部を所蔵していたという。これを、清代に宋元版の蒐集をもつて知られ、あえてその室名に「皕宋樓」や「百宋一塵」などの名を付した蔵書家の状態と比較すれば、明代には古版類がどれほど豊かであつたか

これらの蔵書家たちは、また同時に目録学や校勘学の専門家でもあつた。彼らは、必然的に政治や經濟の中心地と密接

が知られるであろう。

このような例からも、明代の藏書目録は、その大部分が学術的でないという欠点が指摘できるものの、なお時代的な価値を失ってはいない。いったい、明代の書目の数量は、前代に比較して著しく多くなっている。明末の『千項堂書目』は、主として明一代の著作を著録した目録であるが、この中にみえる明代の書目は、家蔵五〇余点の多くを数える。また、近代の『書目長編』⁽⁵⁾二卷中には、明代の書目として、官蔵一四種、家蔵八五種を著録している。しかし、これらの書目中、現存するものは約三分の一にすぎない。

筆者は、明代の書目中、著名なものを網羅して、これまでに約三〇種ほどを調査した。その中で、仏教書や禅籍をまったく著録しない書目は、『南雍書目』『西吳韓氏書目』『得月樓書目摘録』『内板經書記略』『真賞齋賦』『明太學經籍志』などである。また、未調査のものには、『秘閣書目』『行人司書目』

『牧齋書目』『叢業堂書目』『大業堂書目』『寧藩書目』『芙蓉莊書目』『式齋書目』などがあるが、いずれも著名ではなく、資料的にはあまり期待できないと思われる。

かくして、明代以前の禅籍名を著録する書目二一種の個々について、宋元代の書目の場合と同様に、(1)簡単な書誌的解題、(2)著録禅籍の抄録、(3)注目すべき禅籍の解説、などを行いたいと思う。なお、書目の順序は成立年代の順とし、(2)の

抄録については、紙幅の都合により原文での改行を追い込んだり、抄出した目録を追い込みにして並べるなどの措置をとった。ただし、典拠の巻次や類別は()内に明示した。

また、宋元版だけに限定しなかつた理由は、一般に明代の書目は、宋版・元版などの版別がほとんどなされず、わずかに『宝文堂書目』『趙定宇書目』『脈望館書目』などの一部分においてのみ、その版別が明示されるにすぎないからである。さらに、「古版」と記載される場合も、それが宋・元・高麗・五山のいずれの版であるかは不明であり、まったく刊写の別さえも不明な記載が多い。したがって、明らかに明代以後の典籍であるものを除き、刊写の別なく禅籍を抄録することとした。資料として用いる場合は、これらの点には充分注意しなければならない。

1 永樂大典書目考

明代初めの永樂元年(一四〇三)、成祖は解縉等に四部百般の書物を蒐集筆録させ、翌年に『文献大成』が成った。これをさらに拡充し、永樂五年(一四〇七)に完成したのが『永樂大典』である。本文二二八七七巻、目録六〇巻、合計一一〇九五冊という厖大な叢書を、洪武の正韻によつて排列し、明朝が所蔵した。

後に副本がつくられて清朝まで伝わり、北京の翰林院に所

蔵されて、『四庫全書』の編集に利用された。しかし、後に翰林院は焼失したため、現在、『永樂大典』の遺存は僅少であるが、目録は伝存している。禪籍はまったく遺存せず、目録によつて収録書を知るにすぎない。

『永樂大典書目考』四巻は、郝慶柏が編集し、民国一一年（一九二二）の刊行であるが、禪籍は卷三と卷四に著録されている。ちなみに、卷三は『四庫全書』に未収の『永樂大典』の書目、卷四是『永樂大典』の原卷数順に引用書名を列記した目録である。以下、世界書局刊の「中国学術名著」第四輯「類書叢編」第一集第一百冊、によつて明代以前の禪籍を抄出してみよう。

子 祀家 金剛証驗賦一篇宋积延寿撰
興周子美影印本

（卷三）

二六九二	規 百丈清規	积
二六九三	燈 伝燈錄	积
八六七二	燈 五燈会元	积
一九七一	錄 雪竇語錄	积
一九七二	錄 智京語錄	积
二三三〇六	策 滄山警策	积
二三五九七	集 永嘉集	积

（以上、卷四）

右の七点は、ほぼ禪宗の重要な典籍ではあるが、『智京語錄』

だけは例外である。智京とは、おそらく石霜楚円下第五世の方広智京であろうが、一般には知られていない。

いずれにせよ、右の記載だけでは、巻数や底本などが不明であつて、ただ永樂五年の時点でこれらの禪籍が存在していたことが知られるだけであり、宋元版禪籍の研究に資する資料にはならない。

2 文淵閣書目

『文淵閣書目』二〇巻は、正統六年（一四五二）に楊士奇等の題記をもつ藏書目録で、明室の藏書を永樂年中に南京から北京の文淵閣に移した際、検査整理のためにつくられた。元來、この藏書は宋・金・元、三朝の蓄積書四万三千余冊を数えたといわれるが、後にはしだいに散失し、百年後には完本がなくなつたという。

書目には、書名・冊数・完闕が記載されるだけで、刊時は不記であるが、仏書は大量に記載されているから、明室の藏書傾向を知る上からの資料にはなる。テキストは、嘉慶五年（一八〇〇）刊行の「読画齋叢書」収録の重訂本を影印した「書目三篇」所収本により、明代以前とみられる禪籍を抄出し、追込みにして掲載しよう。

僧契嵩鐸津文一部五冊完全

僧北澗文集一部二冊完全

僧雲屋谷

響集一部四冊完全

僧笑隱蒲室集一部一冊完全

僧克新雪廬稟一部

一冊完全

(以上、卷九、集部、日字号第三厨書目)

雪峯集一部五冊

宗門統要集一部二冊

諸銓集都序一部一冊

(證カ)

聯

楞嚴經会解一部二冊

心經注解一部一冊

楞嚴經会解一部二冊

珠通集一部十冊

聯珠通集一部二冊

万善同歸集一部一冊

明覽

祖英集一部一冊

萬善同歸集一部三冊

碧

円覺經略疏一部二冊

六祖壇經一部一冊

六祖壇經一部一冊

巖集一部一冊

碧巖集一部六冊

碧巖集一部五冊

明覺

祖注解金剛經一部一冊

天目語錄一部一冊

林間錄一部一冊

嘉

雪峯集一部一冊

三教語錄六祖壇經

明覺

泰普燈錄一部十冊

三教語錄大全一部一冊

馬祖四家錄一部一冊

宛陵錄一部一冊

伝燈全

禪林僧宝伝一部一冊

三教語錄

羅湖野錄一部一冊

中峯広録一部六冊

景德伝燈錄一部十冊

雪竇洞庭語

唯心訣一部一冊

人天寶鑑一部一冊

禪語問答

大慧語錄一部一冊

中峯広録一部一冊

仏法大明錄

寒山詩一部一冊

佛祖普燈錄一部十五冊

了菴語錄一部一冊

一部四冊

碧巖錄一部十六冊

景德伝燈錄一部十冊

雪竇洞庭語

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

人天寶鑑

一部一冊

圓悟語錄一部一冊

楚石語錄

輔教編一部二冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

黃蘖心要

一部一冊

應菴語錄一部一冊

景德伝燈錄一部一冊

輔教編一部三冊

輔教編一部一冊

輔教編一部一冊

宗鏡節要

一部一冊

仰山古梅錄一部一冊

景德傳燈錄一部十冊

輔教編一部二冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

人天寶鑑

一部一冊

円悟禪師語錄一部二冊

普燈錄一部十冊

輔教編一部三冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

宗門統要

一部一冊

古禪師語錄一部一冊

靈巖語錄一部一冊

輔教編一部四冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

宗門統要

一部一冊

双林語錄一部一冊

南堂語錄一部一冊

輔教編一部五冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

宗門統要

一部一冊

虛堂語錄一部一冊

龐蘊語錄一部一冊

輔教編一部六冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

宗門統要

一部一冊

高峯語錄一部一冊

輔教編一部七冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要

一部一冊

高峯和尙語錄一部一冊

輔教編一部八冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要

一部一冊

達摩觀心論一部一冊

輔教編一部九冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要

一部一冊

護法論一部一冊

輔教編一部十冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要

一部一冊

原人論一部一冊

輔教編一部十一冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要

一部一冊

大藏一覽一部五冊

輔教編一部十二冊

輔教編一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要一部一冊

高峯節要

一冊　注心賦一部一冊　智覺禪師心賦一部一冊　護法論一部一冊
丹霞頌古一部一冊

（以上、卷一七、仏書、寒字号第二厨書目）

右の書目を見るかぎりでも、明室は禅籍類をかなり豊富に所蔵していたことが知られる。それは、中央の禅界に対する関心を示すものとみてよい。刊時が明示されないのが残念であるが、おそらくは、右の中には宋元版をもかなり含んでいたと思われる。

なお、右に掲載しなかつた書目中にも、『報恩道場三師提綱』一部三冊をはじめ、『林間事実』『洞源集』『仏祖慧命』『仏祖命燈』『宗門獅子筋』『禪林秘用』などの、禅籍とみられる珍しい書目が数多くみられる。しかし、いずれも時代不詳であり、目下のところ、当面の宋元版研究のための資料とすることはできない。

3 蓼竹堂書目

蓼竹堂とは、官吏部左侍郎葉盛（一四一〇～一四七四）の藏書室名であり、その数万巻をほこる藏書目録が、葉盛みずから編した『蓼竹堂書目』六巻である。今本には、崇禎七年（一六三四）に葉国華が撰した跋文が付せられている。

この書目は、全体的に前項の『文淵閣書目』と記載も排列

も酷似しているところから、陸心源は本書を葉氏の書目ではなく、『文淵閣書目』の跋鈔であると明示している。⁽⁸⁾
仏書目をみると、卷六に約三〇〇点が記載されるが、なるほど『文淵閣書目』中のものと大部分が一致する。したがつて、ここでは重複をさけ、あえて抄録をしないことにする。

4 百川書志

『百川書志』一〇巻は、明代の武官として有数の藏書家である高儒の、自撰による藏書目録であり、嘉靖一九年（一五四〇）の自序が付されている。その藏書は、質量ともに高く評価されるのみならず、各書ごとに簡単な解題を付している

といふ特長がある。

ただし、当面の禅籍に限るならば、刊行時期が不明な数点の書が記載されるにすぎず、これまた文献研究のための直接資料とはならない。したがつて、ここでは「書目五篇」に収録される影印テキストによつて、該当禅籍を掲げるにとどめる。

冷斎夜話　十巻　宋僧惠洪著

（卷八、子、小説家）

護法論　一巻

宋大丞相無尽居士張商英述。凡一万二千三百四十五言。

福源石屋珙禪師語錄　一巻

宋、常熟清洪著。

(卷一一、子、仏家)

法寶記血脈一卷
頓悟八道要門論一卷

原人論一卷
禪

関入門一卷
達摩血脈一卷

海

慧

士心王伝語一卷
大乘八道坐禪次第要論一卷

唐僧

可

慧

荷沢禪師

微訣

一卷

傳大

寒山子集 一卷
拾得詩

豈干長老詩

三集為天台國清禪寺三隱之作也。

(卷一四、集、唐)

禪宗金剛經解一卷

宋安

保衡

六祖解心經一卷
忠國師解心經一卷

卷

度

起心論

鈔

二卷

密

寶

法

論

護法論

一卷

首楞嚴經会解十卷

井

度

大乘經要一卷

积良

价

起

心

論

鈔

二卷

密

寶

法

論

護

法

論

一卷

石屋詩

二卷

石屋和尚、清洪山居之作。

(卷一五、集、宋詩)

（以上、卷四上、子類、釈家、論）

（以上、同、義疏）

5 国史經籍志

万曆年間に明朝の国史編纂事業が行われた際に、その関係者であつた焦竑（一四六九—一五四八）が私撰して公にしたのが『国史經籍志』六卷である。本書は中国歴代の書籍目録であるが、分類にすぐれる点で目録学の復興と評価されている。¹⁰しかし、先行する古今の書目類からの編録であるから、書目数は多いが所在書目ではないので、資料として用いる場合には注意しなければならない。

仏書類は巻四に記載され、数量すこぶる多い。その中から該当禅籍とみなされるものを、以下抄録して追込みに掲げよう。テキストは、駒沢大学図書館蔵の「叢書集成」所収本による。

明代の一般書目にみえる古禅籍（椎名）

二八六

- 祖唐集一卷 法眼禪師集一卷 法眼前後錄六卷_{元則等編} 遺聖
 集一卷_{雜抄諸禪宗門對語} 楠伽山主小參錄一卷 圓悟語錄十七卷 忠
 國師語錄一卷_{唐忠語} 天台百会語要一卷_{僧義榮纂} 紫陵語一卷 僧
 斋堂禪師語要三卷 大珠語錄一卷 雪峯廣錄二卷_{唐義存} 無
 住說法記三卷_{唐僧純休集} 重顯語錄八卷 净慧禪師語錄一卷 竜
 済語要一卷 净本語錄一卷 普願語要一卷 七科義狀一卷_{段立之間僧悟達答} 禪闕一
 積元集一卷 紹修語要一卷 宏源語錄二卷 祇華嚴漩渦偈一卷_{僧惟助} 謎宗集
 卷_{楊士達問宋美對} 裴休拾遺門一卷 祖伝雜語要一卷 稅氏要語一
 卷 妙中語三卷 五位語一卷 三転語一卷 五峯集三卷
 保甯語錄一卷 净因語錄一卷 秀禪師語錄一卷 懷和尚語
 錄一卷 海會語錄一卷 靈隱勝和尚法要五卷 宝華軻和尚
 語錄一卷 悅泉師掬泉集三卷 雪竇明覺大師語六卷 參元
 語錄十卷_{唐神清} 明覺祖英集一卷 明覺天泉集一卷 明覺後
 集一卷 汾陽紹和尚語錄一卷 汾陽第二代語錄一卷 古塔
 主語錄三卷_{宋吉道} 法燈拈古一卷 大慧普覺禪師語錄三十卷 又
 正法眼藏三卷 又宗門武庫一卷 雪堂行和尚拾遺錄一卷 天
 目中峯禪師広錄三十卷 天如語錄四卷 明學拈古一卷 三
 角山和尚語錄一卷 富沙信老語錄一卷_(覺力) 空峯巖和尚語錄三卷
 北山語錄十卷_{僧清} 克菴禪師語錄一卷_{洪武時人} 玉芝和尚內語二卷
 楚石璵公語錄二十卷
- (以上、同、語錄)
- 龐蘊詩偈三卷 寒山拾得詩七卷 宝覺見道頌一卷 行道難
 歌一卷_{梁傳大士} 禪宗信理偈一卷_{僧觀} 雍熙禪頌三卷_{宋僧弁隆} 法眼
 真贊一卷 淨慧偈頌一卷 宝誌十二時歌一卷 淨漚歌一卷
 達摩妙用訣一卷 了迷破夢訣一卷 達摩信心銘一卷 三祖

- 信心銘一卷 空王銘一卷 王梵志詩一卷 心賦一卷 永
 嘉証道歌一卷_{靈注} 十六羅漢頌一卷 無相歌一卷 光仁四
 大頌一卷 激勵道俗頌偈一卷_{僧良價} 解金剛經贊頌一卷_{傅大士與實志撰}
 仏光東漸圖贊二卷 祇華嚴漩渦偈一卷_{僧惟助} 惟助禪師贊頌一
 卷 元中女寶三卷_{張雲表集} 四家頌古集四卷_{天童雪賣投子丹霞} 謎宗集
 一卷竹林集十卷_{僧本先} 龍居士歌一卷 清居牧牛頌一卷 清
 凉眼禪師偈頌一卷 禪宗頌古聯集二十一卷 石屋禪師詩二卷
 燥鏡錄一百卷 宗門統要十卷_{僧永} 又詠集二十卷 万善同
 無度集六卷 禅宗決疑集一卷 修心訣一卷 船子和尚機緣集
 一卷 希運伝心法要一卷 禅源諸詮集一百一卷_{唐僧宗密} 石頭
 和尚參同契一卷_{唐希遷撰宗美注} 碧巖集十卷_{宋克勤} 感通賦一卷_{宋僧延寿} 林
 間錄四卷_{惠洪}
- (以上、同、雜著)
- 僧宝伝三十卷_{洪惠} 真門聖胄集五卷_{唐元偉} 景德伝燈錄三十卷_{僧道度}
 伝燈玉英集三十卷_{楊億} 天聖広燈錄三十卷_{李遵} 分燈錄三十五
 卷_井 神宗聯燈錄一卷_{明禪} 淳熙聯燈會要一卷 建中靖國
 繼燈錄三十卷_{白慧} 嘉泰普燈錄三十卷_{正受} 禅院瑤林一百卷_{井度}
 緇林古鑒二十四卷_{慧遠} 五燈會元二十卷_{宋普} 至元心燈錄一卷
 伝法正宗記十一卷_{萬契} 宝林伝十卷_{唐僧矩} 高僧懶残伝一卷 一
 宿覺僧伝一卷 雲居和尚示化実錄一卷_{僧元偉} 大慧普覺禪師年
 譜一卷 禪門法師伝_{蜀元全句} 迦葉祖裔記一卷_{僧元海法}
 (以上、同、伝記)
- 以上二〇〇点に近い禅籍名は、これが所在目録ではなく、

また、誤記が多いなどの欠点があるにしても、禅宗典籍史の上からは、みのがせぬ珍しい書目が少なくない。

たとえば、語録類では『祖唐集』一巻、『法眼前後録』六

巻、『無住説法記』三巻、『悦泉師掬泉集』三巻など、偈頌では『了迷破無訣』一巻、『元中女宝』三巻など、雑著では『船子和尚機縁集』一巻、伝記類では『神宗聯燈錄』、『禪院瑤林』一〇〇巻、『緹林古鑒』一二四巻、『至元心燈錄』、『禪門法師伝』五巻など、の各書名がそれである。

これらの、いわば禪門逸書類の記録については、他の文献や資料中にみえる目録や関説、および序跋の遺文などによつて、その存在や内容を客観的に確認しなければならない。それは今後の課題である。

6 李先生家藏目録

本書は、南京戸部尚書李延相（一四八一—一五四四）の蔵書目録一巻であり、延相みずからの編録である。ただ、性格としては、書籍の所在・書名・冊数を函架順に示した函架目録であつて、刊写の別や時代区分がなされず、分類も雑然としている。

該当禅籍は数点がみいだせるので、函架は省略して追込みに抄録しておく。テキストは駒沢大に所蔵される「玉簡齋叢書」二集の所収本による。

楞嚴会解二本 禪林類聚三套三十本 晦菴語錄四本
藏叟摘稿 寒山子詩集 大唐故大智禪師碑銘
蒲室集

右の禅籍中の『晦菴語錄』は、南宋の晦菴弥光か晦菴慧光のいずれかによる語録とみられる。この両者の語録は、ともに『続古尊宿語要⁽¹¹⁾』中にわずかの語が知られるにすぎないが、元来は四巻の語録が存在したことを探らしめる点で貴重な記録である。

7 宝文堂書目

宝文堂とは、春陵の人で国子監司業となつた晁瑮と、その子の晁東吳が所蔵する蔵書室の名で、豊富な分量で知られる。『宝文堂書目』三巻は、嘉靖年間（一五二二—一五六七）に晁瑮が編録している。⁽¹²⁾この目録には、書目の巻冊数や撰者名は記載しないが、まれに書目の下に細字で宋・元などの版別を記しているのは貴重である。つまり、晁氏は古版類に特別の注意をはらつていたのである。

テキストには、北京図書館所蔵の明代筆写本を、一九五七年一二月に上海の古典文学出版社が翻刻した刊本がある。東洋文庫所蔵のこの刊本によれば、「仏藏」の項目中にみえる仏教書目は実に五四二点、うち禅籍は約二五〇点を数え、民間人としては晁氏が異例の仏書蒐集家であったことが知られる。

る。書目があまりにも多いので、ここでは特に宋元版や旧刻なることが明示される禅籍に限定して、以下に抄録してみよう。

五燈会元元板一部不全

五燈会元旧板

輔教編旧刻

禪林永嘉旧刻

万善同帰元刻

禪林僧宝伝元刻配合

僧北磵集宋刻

大藏一覽旧刻

(以上、卷下、仏藏)

林間錄二本
石門洪覺範天廚禁臠一本抄
龐居士集一本
寒山子詩一本

(以上、卷一、盈字号厨)

右の記載中、『万善同帰』の元版、および、『禪林永嘉』と『大藏一覽』の明代以前の旧刻本は、それぞれ知られていない。したがって、古版禅籍の研究にとって、これらの記載はきわめて貴重な資料となるものである。

9 内閣藏書目録

『天一閣藏書目録』四巻は、寧波に居住し古今有数の蔵書家として知られる兵部右侍郎范欽が、みずから編録した蔵書目録である。この蔵書は、清朝が『四庫全書』(一七七三)を編集した際に、実に六三八種を底本としたという。しかし、

8 天一閣藏書目録

『天一閣藏書目録』四巻は、寧波に居住し古今有数の蔵書家として知られる兵部右侍郎范欽が、みずから編録した蔵書目録である。この蔵書は、清朝が『四庫全書』(一七七三)を編集した際に、実に六三八種を底本としたという。しかし、

七万巻の数量をほこった蔵書も、清末に太平天国の乱でかなりの損害を受け、民国になってからも半数以上が失われたといわれる。⁽¹³⁾

なお、天一閣は現在、寧波市に嘉靖四〇年(一五六一)建立の蔵書楼が現存し、解放後に回収や増加した書を含めて、約三〇万巻を現蔵している。⁽¹⁴⁾

本書目は、原蔵書時代の分厨目録であつて、厨別に書名と冊数を記載するだけである。該当する禅籍は、わずか四点にすぎないが、「玉簡齋叢書」一集の所収本により追込みで抄録しておく。

林間錄二本
石門洪覺範天廚禁臠一本抄
龐居士集一本
寒山子詩一本

該当禅籍は、『文淵閣書目』中にあれほど大量に記載されていたにもかかわらず、なぜか本書には左記の二点をみいだすにすぎない。「適園叢書」所収本のテキストから抄録しておくにとどめる。

鐸津文集五冊全 宋藤州釈契嵩著凡二十卷

谷響集四冊全 元僧雲居著

雪廬稿一冊全 元至正間鄱陽釈克新著周伯琦序

(以上、卷三、集部)

10 世善堂藏書目録

前掲『国史經籍志』の著者、焦竑の友人である陳第（一五四一～一六一七）は、『毛詩古音考』の著者として音韻学史上不朽の人であるが、その藏書目録が『世善堂藏書目録』二巻である。相当な蔵書をほこったが、清の乾隆初年（一七三六^{〔16〕}）には早くも散佚したといわれる。

本書は巻数と撰者だけの記載であって、さしたる資料的価値はない。したがって、陳氏伝家の筆写本を底本とする「知不足齋叢書」収録本を影印する「書目三篇」所収書により、

明代以前の禅籍を抄出し、追込みに掲載だけしておく。

冷斎夜話六卷僧惠洪

(卷上、史部、碑史野史并雜記)

金剛般若經一卷六祖惠能解一卷 禅宗解一卷 六祖壇經三卷唐僧

明代の一般書目にみえる古禅籍（椎名）

慧眇撰 観心論一巻 宗鏡錄一百巻 伝燈錄三十巻 広燈

錄三十巻 分燈錄二十五巻 続燈錄三十巻 普燈錄二十巻

青州百問一巻 重刻伝法正宗記十二巻宋濂序

(ママ)
池陽百問一巻

問法錄二巻 雪峰和尚語錄二巻 永嘉和尚語錄一巻

(卷下、集部、釈典)

11 趙定宇書目

『趙定宇書目』一巻は、趙用賢が自分の蔵書を目録化した書である。用賢は常熟の人で、隆慶年間（一五六七～一五七三）の進士。万曆中に官検討となり、のちに吏部侍郎に終る。

『松石齋集』『二吳文獻志』などの著述がある。^{〔17〕}

本書目には、若干の書には版刻が記載され、また、次項の重要書目である『脈望館書目』の前身である点で、注目すべき蔵書目録である。テキストは、上海市文物保管委員会所蔵の筆写本を、一九五七年一二月に上海の古典文学出版社が影印出版した一冊がある。東洋文庫所蔵の該書によつて、該当禅籍を抄出し、追込みにして掲げよう。

石門文字一套六本 羅湖野錄二本 楞嚴經纂註五本 四十二章
(ママ) 禪師唯心訣一本 普菴語錄四本 五燈會元十本 虚堂習慶三本
菴事須知一本 濟顛語錄一本 宗鏡錄二十五本 三聖集一本
註解金剛經二本 高峰語錄一本又二本 六祖檀經一本 宗門武
庫一本 金剛經註解一本 投子一本 丹霞一本 禅宗永嘉集

注二本 禅源諸詮集一本 天童一本 住慈明誨全二本 抄五

燈会元二本 大慧正法眼藏一本 南堂了菴語錄二本 笕溪牧

潛集一本 天始剩語一本 雪竇祖英集一本 南極語要一本 傅

大士語錄一本 人天眼目集一本 竹泉語錄一本 洞山初禪師

語錄一本 万寿語一本 投子 天童 丹霞各一本 雲門語錄

一本 南院顥和尚語要 楊岐会老語錄 先興聖國師玄要廣

集 広教省禪師語錄 首山念和尚語錄一本 道吾真禪師語

要 神鼎禪師語要一本 全上

（以上、仏書）

僧宝伝六本 大悲禪師普說一本 禅林類聚二十本

（以上、内府板書）

北磯詩集（ママ） 万僧全錄

禅林類序 万僧全錄

（以上、元板書）

本書目は、特に宋元版の別を明記し、また、「不全旧宋元板書」や「旧板書」などの項目を設けて宋元版の補充を企るなど、旧刊本を重視する態度が顕著である。テキストは、異本により出入があるといわれるが、ここでは駒沢大学所蔵の「玉簡齋叢書」二集の所収本により、該当禅籍を抄録しよう。なお、「不全宋元板書」以外の書名は追込みとする。

禅林類聚五本 丹霞集一本又一本 天童集一本 投子集一

本又一本共一套 禅源諸詮集二本 金剛經注解一本 三聖

集一本 六祖壇經一本 菩事須知一本 虚堂習聴一本

宗門武庫一本 濟顛語錄一本 祖師語錄八種四本 五燈会

元十本 羅湖野錄一本 明州三仏伝一本 万寿語錄一本

別岸語錄一本 四十二章唯心訣一本 住慈明誨二本 普菴

語錄四本 石門文字禪六本 竹泉和尚語錄一本 又一本

人天眼目一本 雪竇祖英集一本 天如剩語一本 笕溪牧潛

集一本 南堂語錄二本 傅大士語錄一本 宗鏡錄二十五本

12 脈望館書目

脈望館とは、前項の『趙定宇書目』の編者、趙用賢の子で、刑部郎中趙琦美（一五六三—一六二四）の蔵書室をいう。彼は父にまけずに古書の蒐集や謄写比較に努力すること、寝食を忘れるほどであったといわれ、その自撰目録が『脈望館目録』一巻である。彼の没後、この蔵書は絳雲樓に入り、多くは火災で焼失したが、めぐりめぐつて日本の内閣文庫に伝わるもの、二、三にとどまらぬという。⁽¹⁹⁾

右の中でも珍しい書名は、『虚堂習慶』『抄五燈会元』『南極語要』『万僧全錄』などである。とりわけ、最後のものは元板書とされ、今日、零本が台灣の国立故宮博物院に所蔵される『万僧問答景德伝燈全錄』⁽¹⁸⁾と同種とみられ、この書が元版であること傍証する貴重な記載である。

また、内府板書とされる三点は、おそらく明朝の官板を意味するが、大藏經以外の單行書であるならば、明朝による禅書出版の実状を知らしめる注目すべき資料となろう。

參禪要訣一本 龐居士語錄一本 六祖大師壇經一本 高峰

語錄二本 又一本 大慧正法眼藏一本 碧巖集一本 禅宗

永嘉集註一本

(以上、張字号、子類五、仏家)

(収字号、集類三、唐人集)

寒山詩二本
景德伝燈錄一本

欠一之十五 十九以後並欠

禪林類聚四本

存十一十二 十五之十九

大会正法眼藏(慧か)

上卷全 中下卷脱

中峯広録

欠一之二十 三十一以後並欠

如如居士三教大全

欠四卷以後

大藏一覽

存第七卷

(以上、余字号、不全宋元板書、子類)

緇門警訓四本

欠上卷一号之三十二号

北澗詩集五卷(澗か)

(以上、同、集類)

大慧禪師普說一本 心賦四本 僧宝伝六本 小釈迦(要錄か)

本 鼓山法堂玄要一本

(以上、成字号、旧板書、仏家)

右の記載から、当時、脈望館に存在した宋元版禅籍を整理すると、つぎのとおりとなる。

〈完本〉

大慧禪師普說、註心賦、禪林僧宝伝、小釈迦要錄、鼓山法堂玄要集

〈端本〉

景德伝燈錄(卷一六～一八)、禪林類聚(一一～一二、一五～一九)、正法眼藏(上)、中峯広録(二一～三〇)、如々居士三教大全語錄(一～三)、大藏一覽(七)、緇門警訓(上三三二紙以後、下末迄)、北澗詩集(一～五)

これらの中で、宋代以後の書目では写刊の別さえ判然とせず、また宋元版の所在も知られなかつたものに、『小釈迦要錄』『鼓山法堂玄要集』の一書がある。これらの書は、本目録により明代以前の古版の存在が立証されるわけである。また、本目録にみえる宋元版に端本類が多いという事実は、すでに明末における宋元版がいかなる存在であつたかを知らしめるものである。

13 古今書刻

『古今書刻』二巻は、南京光祿卿の周弘祖が著した書で、万曆年間に刊行されている。巻上には官私の刊行書目を刊行者別に表示し、巻下には各地に所在する石刻の目録を掲げ、

学術的に有益な目録の一つである。藏書目録ではないが、特に明代刊行の書籍を知るべき津梁とされている。⁽²⁰⁾

ただし、各書目には刊行年代の記載がなく、仏教書の記載そのものも少ない。禅籍はわずかに三点であり、刊写さえも不明なため、抄録だけにとどめる。テキストは、「觀古堂書目叢刊」を影印収録する「書目五篇」所収本による。

晦菴語錄

（卷上、南直隸、徽州府）

六祖壇經 伝燈錄

（以上、卷上、福建、書房、医卜星相堪輿玄修等類）

14 徐氏紅雨樓家藏書目

紅雨樓は、閩県の徐氏が蒐集した藏書室の名称で、『徐氏紅雨樓家藏書目』七巻は、徐勦（一五六五～一六四六頃）が編録したその目録であり、万曆三〇年（一六〇二）に成る。この蔵書は五万三千余の多くを数えたが、清代の初めには散佚し、その一部は日本にも舶載されたといわれる。本目録は書名・巻数・撰者を記載するのみで、まれに刊行地を載せている。

仏教書の著録は比較的に多く、禅籍中には珍しい書名もみられる。該当する禅籍を抄出し、追込みで掲載しよう。テキストは前掲7の『寶文堂書目』と合刻する上海古典文学出版社の刊行本による。

（卷三、子部、小説類）

大顛注一巻	金剛經六祖口訣解一巻	会解十巻惟則	六祖壇經一巻	円覺大疏十二巻宗密	禪林僧宝伝三十巻惠洪	大顛祖師別伝一巻潮州刊	永嘉禪師語錄一巻唐沙門玄覺	普覺禪師語錄三十一巻	四家語錄四巻馬祖	三教語錄	傑峯語錄八巻衢州世愚	石屋法語二巻	玄妙語錄三巻	林間錄二巻								
羅湖野錄二巻宋曉榮	百丈清規語錄十二巻	古梅禪師語錄二巻	元應山海男	四家頌古八巻天童	傅大士語錄四巻	雪贊禪師語錄二十巻	元叟端禪師語錄八巻元徑山人	吳山端禪師語錄一巻宋恕中和尚語錄元	虎邱隆和尚語錄宋	雲庵淨禪師語錄六巻宋応菴和尚語錄四巻	普菴菩薩語錄四巻	萬善同帰三巻	青州通玄一巻	禪源諸詮一巻	寒山拾得豐干詩五巻	宗門武庫一巻普覺	禪林寶訓二巻	擬寒山詩一巻宋慈受	禪關策進一巻宋慈受	大藏一覽十巻陳実	中峯淨土詩一巻	宗鏡錄一百巻
筠溪集石門覺範比邱紹德洪	鐸津僧仲靈	（以上、卷〇、子部、紹類）	（以上、卷〇、集部、宋詩）																			

右の中では注目すべきは、『大顛祖師別伝』『傑峯語錄』などの書名である。おそらくは、それぞれ大顛宝通の伝記と傑峯世愚の語錄であろう。ことに、傑峯世愚（一二〇一～一三七〇）は烏石世愚ともいわれるが、從来その語錄の存在はまったく知られていないだけに、貴重な資料となるものである。

羅湖野錄四巻

15 重編紅雨樓題跋

本書三巻は、前項と同じく徐燦の撰述で、紅雨樓の主要書二二〇篇に対する題跋集である。題跋は書目ではないが、一種の解題であるから、あえて対象とした。

ところが、禅籍は『寒山詩』と『全室集』の二点を収めるにすぎない。しかも、後者は明代撰述のため、前者だけを探録する。この書の伝承を知るための一資料となるものである。テキストは、「峭帆樓叢書」所収本を影印収録する「書目三編」本による。(句読点、筆者)

寒山子詩集

余、他日偶訪瀚上人於平遠台山房、見案頭、有寒山子詩一帙。上人不知愛重、鼠噉其腦、漸至于中。余曰、寒山之詩、詩中即偈、師其知寒山之禪機乎。上人茫然不答。余遂丐歸。上人視之、如棄敝屣也。山窓無事、手自黏補重、加裝潢第、鼠噉處閑深傷字、為可恨也。載觀卷首朱、晦翁陸放翁二札。則明老南老賢、於瀚上人遠矣。識者能不呵呵大笑耶。己亥閏四月、徐惟起跋。

16 万巻堂書目

『万巻堂書目』四巻は、万曆中に周藩宗正の官位にあつた西亭先生朱陸樞が、自分の蔵書の目録をみずから編録した書である。この蔵書は、数量の多い割には稀書に乏しいといわれている。また、書目の記載は、書名・巻数・撰者だけにと

どまる。のみならず、この蔵書自体は惜しくも明末の乱に水没して、まったく後代に伝存しない。⁽²³⁾

ただし、陸樞は東坡居士とも称した仏教者であつたためか、仏教の書目は豊富である。その中から該当禅籍を、「玉簡齋叢書」二集の所収本から抄出し、追込みに掲載しておく。

大藏一覽十卷陳寅
感通賦二卷延寿
五燈会元二十卷普濟
禪
林宝訓二卷淨善
禪林類聚二十卷智鏡
緇門警訓二卷
冥枢
会要三卷祖心
円覺經略疏二卷宗密
岸和尚語錄三卷
了庵和尚語錄一卷
天眼目三卷智昭
從容庵錄三卷方松老人
碧岩錄十卷円悟
空
谷伝声錄三卷林泉老人
虛堂習聴錄三卷林泉老人
洞山寶鏡三昧
一卷従論
(倫カ)
六祖壇經一卷
楞嚴會解四冊
註心賦四卷延寿
頌古公案一卷雪寶
宗鏡会要二卷祖心
大龍翔集慶寺語錄一冊
禪宗永加集二卷魏淨(嘉カ)
大顛註解心經一卷
伝心法要一卷
聖詩集二卷

(以上、卷三、釈家)

17 潤生堂藏書目

『潤生堂書目』一四巻は、明末期の紹興の人、江西右參政祁承樸による自撰の蔵書目録である。多くの蔵書を四部各類に分け、書名・冊数・巻数・撰者を記載する。仏教書はすこぶる多く、書目は数百をこえ、分類も詳細である。ただ、惜しむらくは、刊時にはほとんど注意をしない。

明代の一般書目にみえる古禅籍（椎名）

二九四

いま、萃古齋鈔本とされる内閣文庫所蔵の筆写本により、該当禅籍を抄出して追込みに掲げてみよう。

- 百丈清規八卷四冊 祝徳輝 中峯和尚菴事須知一卷一冊 明本
 (以上、卷、子部、祝家、律儀)
- 注華嚴法界觀門一卷一冊 祝宗密 妙法蓮花經合論七卷七冊 恵洪
 金剛經十七家注四卷二冊 金剛解義 円覺經略疏(二卷一冊) 又円覺經略疏四卷
 (善月 祝密述 德洪 楞嚴會解疏(十卷十冊) 維則会解 附楞嚴擲丸一卷一冊 伝燈疏 仏祖三經註
 解沙門守 (遂註)
- 原人論一卷一冊 沙門宗密述 護法論一卷一冊 唐張商英述
 (以上、同、大小乗論)
- 宗鏡錄一百卷三十二冊四套 又宗錄(官板)一百卷三十冊 真権会要四卷四冊 祝
 祖心集 景徳伝燈錄三十卷二十冊二套 祝宗曉 五燈会元(二十卷二十一冊) 宗
 旧版 新版 集元訖 清茂統 (マヤ) 宗永 (宋カ) 宗祝
 五宗天人眼目三卷一冊 晦岩編 宗門統要統集十二卷五冊 宗
 禅宗集要四卷二冊 無相禪師集 断際禪師心要 又宛陵錄 普照禪師修心訣
 三冊 黃檗伝心要法一卷一冊 正法眼藏(三卷) (マヤ) 宗
 天如禪師禪宗要訣一卷一冊 (マヤ) 宗
 (以上、同、宗旨)
- 古尊宿語録四十卷十冊 四家語録四卷一冊 馬祖(百丈) 黄檗(臨濟) 後四家語
 錄四卷一冊 天童(雪竇) 投子(丹霞) 臨濟禪師語録(一卷一冊) 麗居士語録(二卷一冊)
 円悟弘果禪師語録二十卷四冊 虎邱隆和尚語録一卷一冊 雲菴真
 净禪師語録六卷二冊 応菴和尚語録十卷二冊 湖州山峻禪師語録
 二卷一冊 静端著 羅湖野録二卷一冊 晓瑩集 大慧禪師書(二卷二冊) 幷拾遺一卷一冊
 三十卷八冊 高峯大師語録一卷一冊
- 中峯和尚広録三十卷六冊 元叟禪師語録八卷二冊 楚石禪師語録二
 卷四冊 明覺禪師語録 傅大士語録 天如語録四卷四冊 善遇編 普
 菩禪師語録四卷四冊 祝至柔編 石屋和尚山居詩并當湖語録二卷一冊
 (以上、同、止觀)
- 頓悟入道要門二卷一冊 慧海述 禪林宝訓四卷一冊 净善 緇門警訓二卷共二冊 俱沙門景隆
 (以上、同、警策)
- 永嘉大師禪宗集一卷一冊 証道果(歌カ) 一卷 唐元覺撰 禪弁(載碑乘) 一卷 張商英
 冊 俱祝延寿撰 又心賊註四卷四冊 永明寿禪師心賦一卷
 禅宗決疑集一卷 万善同帰三卷三冊 (マヤ) 証道果(歌カ) 一卷 唐元覺撰
 頓悟入道要門論一卷 唐沙門海慧 諸方門人參問錄一卷 圭峯和
 尚禪源諸詮集四卷二冊 祝宗密述 (宋カ) 宗
 (以上、同、詮述)
- 禪宗頌古聯珠通集四十卷八冊 (宋カ) 宗沙門法應集 万松老人從容錄三卷三冊
 元沙門普会続 万松老人請益錄二卷一冊 林泉老人空谷集三卷三冊 林泉老人虛
 堂集三卷三冊 仏果擊節錄二卷二冊 明覺拈古 仏果擊節 円悟老人碧巖集十卷
 四冊 通元青州二百門二卷一冊 寒山子詩一卷一冊 擬寒山詩一卷
 和張無垢頌一卷一冊 (以上、同、提唱)
- 伝法正宗記十卷二冊 僧契嵩撰 禪林僧宝伝三十卷三冊 祝惠洪 林
 間錄三卷三冊小板 德洪集 (以上、同、記伝)
- 大藏一覽十五卷 宋陳寅編 青原山重建淨居禪寺縁起一卷一冊

鐸津文集二十二卷四冊

石門文字禪三十卷六冊

洪覺範著

(以上、同、禪余)

六祖大師法寶壇經一卷一冊

円覺經略疏一冊

黃蘖伝心法要一卷

一冊 万善同歸三卷一冊

古尊宿語錄四十卷十冊

五燈会元十冊

(以上、同、文集)

(以上、同、続収摠附)

右の九三點中、明代以前の旧版と明示されているのは『五燈会元』だけであり、他は刊時不詳である。ただ、禪門の文献史の上からは、『禪宗集要』『後四家語錄』などの叢書名が注目される。すなわち、前者は『無相禪師集』『断際禪師心要』『宛陵錄』『普照禪師修心訣』という永嘉・臨濟・黃蘖・知訥、四者の著述を合集した書で、他に知られぬものである。

また、後者は天童・雪竇・投子・丹霞という青原系統の四家の頌古評唱を合集した書であり、一般には『四家錄』や『四家評唱錄』といわれている。⁽²⁵⁾ところが、この『澹生堂書目』では、馬祖以下の四尊宿の語錄である『四家語錄』の次に『後四家語錄』の名でおかれている。つまり、これが原題名であったとすれば、該書の編集に関する興味ある資料となるものである。

その他、『湖州山峻禪師語錄』二卷一冊は、南岳下一三世で雲蓋守智に嗣いだ湖州道場俊とされる人の語錄とみられる。

明代の一般書目にみえる古禪籍（椎名）

伝記も語句もまったく知られぬ北宋末期の一禪者に、明末にお二卷の語錄が伝存していたことを知らしむるだけでも、本書目の記載は貴重である。

18 近古堂書目

『近古堂書目』二卷は、蔵書も撰者も不明ながら、内容的には明末の成立といわれる。⁽²⁷⁾分類目録としては、刊写の別はおろか卷冊の記載もなく、資料的な価値は薄い。以下、「玉簡齋叢書」二集所収本により、該当禪籍を抄録するにとどめる。

諸祖讚頌 続伝燈錄 中峰広錄 三聖詩和集 鐸津文集
頓悟要道入門論 禪林宝訓 人天宝鑑 明覺雪竇語錄 無見語錄 了庵語錄 高峰語錄 天如語錄 円悟語錄 応庵語錄

(以上、卷上、子、釈家類)

心賦 禪林僧宝伝 汝州南院顥和尚語要 大慧禪師普説語錄 袁州小釈迦要錄 雪竇明覺大師祖英集 鼓山法堂玄要
廣集 平江路万寿寺語錄

(以上、同、釈經類)

(卷下、宋人集類)

(同、元人集類)

北磯詩文集比丘
(湛)カ居簡
澹然居士文集

筠溪牧潛集円至

蒲室集

雪蘆稿支新

(以上、同、僧人集類)

19 汲古閣珍藏秘本書目

汲古閣は、明末の常熟の蔵書家、毛晋（一五九八—一六五九）が所蔵した蔵書室の名である。この蔵書には影宋精本が多く、古書を伝刻して世に流布させたほどであった。本目録一巻は、

晋の子である毛辰⁽²⁸⁾が手書して潘耒に送り、購主を求めたための目録といわれる。したがって、書名・撰者・巻冊・刊写などのほかに、売価が付記されている。

いま、「叢書集成簡編」初編の収録本によれば、該当禪籍はつぎの二点にすぎない。

元板輔教編一本五錢
湛然居士集十四卷三本
耶律楚材
丙午二錢
旧抄

（子部）
（集部）

右のうち、後者は前代の筆写本であろうが、前者は元版『輔教編』の存在を明示する資料として注目される。すなわち、わが春屋妙葩によつて觀応二年（一三五一）に刊行された幻住庵流通本の覆刻であるが、その底本である元版の存在は他に知られていない。本書目により、この元版伝本が明末の汲古閣に所蔵されていたことが判明したわけである。

20 千項堂書目

『千項堂書目』三二一巻は、黃虞稷の編録した書目であるが、

21 明史芸文志

『明史』三三六巻は、張延玉等が勅を奉じて編纂し、清代

蔵書目録ではない。明人の著書を四部各類に分けて編録した著作目録で、後の『明史』芸文志の基礎となつたといわれる。⁽³⁰⁾しかし、禪籍に限つても明代以前の著作がわずかながらみいだせるから、すべてが明代の著作とはいえない。

ともあれ、蔵書目録ではないから、古版研究などのための史料としては、ほとんど役に立たない。ただ、本書は比較的に著名な目録であるから、ここでは「書目叢編」所収本により、前代の禪籍を抄録だけしておく。なお、本目録で『大藏一覽集』を誤つて明代の作としたために、次項の『明史』芸文志をはじめとして、以後この誤りが踏襲されてゆく。

梵琦楚石禪師語錄二十卷
又頌古百二十偈
吳人中僧
字天洪武真
四卷
梵琦西齋淨土詩二卷
惟則鷗臭吟
淨善禪林寶訓四卷
陳寔^(美加)大藏一覽十卷
明初寧德縣人
帰集三卷
教苑清規十卷
（以上、卷一六、子部、釈家類）

梵琦北游集又鳳山集又西齋集
字楚石小字雲曜象山人居海鹽天寧寺明初徵至京建法會賜座第一

（卷二八、集部、釈氏）

僧円至筠谿牧潛集七卷
僧善住谷響集四卷
僧大訢蒲室集十
五卷
字笑隱
南昌人
僧元珙石屋山居詩二卷
（以上、卷二九、集部）

中葉の乾隆四年（一七三九）に完成した正史である。編纂の開始からは実に六一年を費している。⁽³¹⁾

本書の芸文志は四巻を占めるが、他の正史の場合と異なり、内容はもっぱら明人の著作にとどまる。しかも、前項の『千項堂書目』と一致する書目が多い。⁽³²⁾以下、近年に台北の中華書局から刊行された考勘本「[十四史」所収本により、該当禅籍を抄録のみしておく。

- 陳実大藏一覽十巻 梵琦楚石禪師語錄二十巻 祖心冥枢会要
四巻 浄喜禪林寶訓四巻
(以上、卷九八、芸文三、釈家類)
清瀧蘭江望雲集二巻 延俊泊川文集五巻 克新雪廬稿一巻
守仁夢觀集六巻
(以上、卷九九、芸文四、別集類)
- (1) 長沢規矩也『和漢書の印刷とその歴史』(『長沢規矩也著作集』第二巻所収)第四章第四節「明代の刊本」参照。
- (2) 陳登原『古今典籍聚散考』巻二、第八章「明代の典籍聚散」吳晗『江浙藏書家史略』等を参照。
- (3) 陳氏前掲書、p. 223~231
- (4) 同、p. 226~231
- (5) 邵瑞彭等編、民国一七年（一九二八）序刊。
- (6) 桂五十郎『漢籍解題』『世界大百科事典』三、『大漢和辞典』六、等による。
- (7) 喬衍琯『書目三編叙錄』所収「重印『文淵閣書目』序」

- (8) 長沢規矩也『支那書籍解題』p. 154
- (9) 同、p. 158
- (10) 倉石武四郎『田録学』p. 115~116
- (11) 続藏一・二・三・四・一
- (12) 長沢氏前掲書 p. 162~163『図書学大辞典』p. 585
- (13) 長沢氏前掲書 p. 119、倉石氏前掲書 p. 114
- (14) 「天一閣簡介」(天一閣のパンフレット。一九八〇年一一月、現地で筆者受領。)
- (15) 長訛氏前掲書 p. 58、陳氏前掲書 p. 225
- (16) 長沢氏前掲書 p. 163~164、倉石氏前掲書 p. 116
- (17) 『明史』卷二十九、『明史稿』卷二十三
- (18) 阿部隆一『増訂中國訪書志』p. 125 参照。
- (19) 長沢氏前掲書 p. 164、倉石氏前掲書 p. 116
- (20) 長沢氏前掲書 p. 314、喬衍琯『書目五篇叙錄』
- (21) 「重印紅雨樓題跋序」(『書目三編叙錄』所収)、倉石氏前掲書 p. 117
- (22) 『南宋元明禪林僧宝伝』巻一(続藏二N・1O・三六一~三六二b)、『五燈会元統略』巻十九(続藏二N・1I・四五六a~d)
- (23) 長沢氏前掲書 p. 157、『図書学大辞典』p. 428
- (24) 長沢氏前掲書 p. 24
- (25) 拙稿「元版『四家錄』の資料」(『駒沢大学仏教学部論集』一〇)
- (26) 『嘉泰普燈錄』田録(続藏二N・1O・六c)
- (27) 長沢氏前掲書 p. 167

- (28) 同、p. 167～168
- (29) 抽稿「宋元版禅籍研究Ⅲ—輔教篇・鐸津文集—」(『印度學
仏教學研究』一一七一)
- (30) 長沢氏前掲書 p. 38' 内藤湖南『支那目録学』所収「明季
清初の藏書家書目」(『内藤湖南全集』第一二一巻、p. 426)
- (31) 『漢籍解題』p. 86～87
- (32) 『千項堂書目』と『明史』芸文志の関係については、姚名
達『中国目録学史』の史志篇「明国史經籍志千項堂書目及明
史芸文志之演变」に詳しく述べる。